平成２２年度研究成果資料≪教育課程≫

学校名（ふりがな）	奈良県立二階堂高等学校（ならけんりつにかいどうこうとうがっこう）

校 長 名： 葛 谷 和 順

所 在 地： 奈良県天理市荒蒔町100-1

電話番号： 0743-64-2201

新学習指導要領の趣旨を具体化するための指導方法等の工夫改善に関する研究	
研究対象教科等	国語（国語総合）

《研究主題》

学ぶ意欲を高める指導の改善
「義務教育段階での学習内容の確実な定着を図る学校設定科目及びその指導方法の開発」

【研究の要点】

義務教育段階での学習内容の確実な定着を図るため，10分間のモジュール形式の指導を取り入れた教育課程や，そこで用いる教材の研究・開発を行った。平成21年度は放課後を利用して試行し，その成果を受けて，平成22年度は，1年生で「国語総合」の増加単位として実施した。2，3年生用の教材も作成し，全校で朝のSHR前10分間の『BRUSH UP TIME』として実施した。また，SHRでも『まがたまノート』と名付けた連絡ノートを使用するなど，全校で言語活動の充実を目指した。

これらの取組において，生徒には熱心な姿勢が見られ，主体的な学習態度が養成された。教員も，これらの取組の成果を評価しており，9割以上が今後も継続すべきであるとしている。平成23年度以降については，朝の10分間の学習を，全学年課外学習の扱いとし，全校で当該時間の活用について更に研究を進めていく予定。

Ⅰ 研究指定校の概要

１ 学校・地域の特色及び実態

本校は，教養コース・国際理解コース・数理コースに分かれた全日制普通科高校であり，奈良県の入学者募集帰国生等特例措置校の一つとして，外国人生徒の受入れを行っている。卒業後の進路は，４割の生徒が大学・短期大学に，３割の生徒が専門学校に進学し，３割の生徒が就職をしている。

県内高等学校の統合再編が進む中，生徒の変容が見られ，平成19年度には転退学者が全校生徒の10%となり，この転退学者数を減らし，誇りを持って生き生きとした学校生活を送れるよう，生徒指導面での取組を重点的に行った。

その結果，生徒たちは比較的落ち着いた学校生活を送るようになっているが，依然退学者数は４～６%あり，義務教育段階の学習内容の定着が十分でなく高等学校の学習への接続に課題のあるものもおり，主体的に学ぶ姿勢を身に付けさせ，学ぶ喜びを体験させるような取組が必要となっている。

２ 学校の概要（平成22年4月5日現在）

（高等学校の例）

課程	学科	１年		２年		３年		計	
		学級数	生徒数	学級数	生徒数	学級数	生徒数	学級数	生徒数
全日制	普通科	7	284	7	266	8	268	22	818
計		7	284	7	266	8	268	22	818

教員数 54名（９名）

１年 国語総合５単位

２年 現代文３単位，古典２単位（選択），
基礎国語２単位（選択）

３年 現代文講読３単位，古典３単位（選択），
国語表現２単位（選択）

Ⅱ 研究の内容及び成果等

１ 研究主題等

(1) 研究主題

学ぶ意欲を高める指導の改善
「義務教育段階での学習内容の確実な定着を図る教育課程及び指導方法の研究・開発」

(2) 研究主題設定の理由

本校生徒の多くが，義務教育段階での学習における小さなつまずきが原因となって高等学校の必

履修科目の学習へ円滑に移行できなくなっている。そこで「学ぶ喜び」を体感させ，主体的に学習に取り組む態度を養い，学習の基本となる言語活動を充実させるための取組を，国語科が中心となって行う。その際，基礎的・基本的な知識・技能を習得するための指導方法や教材の開発を行い，学校全体で取り組むための学校設定科目の構築まで視野に入れた教育課程の研究を行った。

(3) 取組体制

校長，教頭，教務主任（理科），国語科３名，地歴公民科１名，数学科２名，英語科２名からなる「BRUSH　UP　TIME推進委員会」を設け，教材の研究・開発と実施計画の策定を行った。また，教材の作成や成果の把握等には国語科が当たった。当該時間の指導等は，担任と副担任が担当した。

(4) ２年間の主な取組

平成21年度	校内に研究組織を立ち上げ，先進校の事例等を参考に，翌年から実施する，モジュール形式の授業を含めた新しい教育課程を開発した。そのための研究として，１年生において義務教育段階での学習内容の確実な定着を目指した教材を作成し，２学期から放課後10分間の時間を設定して取り組んだ。また，同じく１年生のＳＨＲにおいて『まがたまノート』と名付けた連絡ノートを使用し，聴写などの言語活動に取り組んだ。
平成22年度	４月当初から全校で始業時間を10分早め，朝のＳＨＲ前に『BRUSH　UP　TIME』と名付けた時間を設定し学習に取り組んだ。１年生では「国語総合」の増加単位をモジュール形式で実施する時間とし，２，３年生では課外学習の時間とした。１年生は，主に義務教育段階での学習内容を中心に，各教科等の学習のための基本的な語彙（以下「基本用語」という）の習得に資する漢字の学習など，２，３年生は進路実現に資するような内容の学習に取り組んだ。更に『まがたまノート』も全校に広め，言語活動の一層の充実を図った。

２　研究内容及び具体的な研究活動

(1) 研究の重点

教育課程の研究・開発，言語活動の充実

(2) 具体的な取組

①　平成22年度，１年生において「国語総合」を１単位増加し，これを毎朝10分間のモジュール形式の授業として実施した。２，３年生でも課外学習の時間とするため，平成22年度から全校で始業時間を10分早めた。名称については，「義務教育段階での学習内容の確実な定着」という観点から，『BRUSH　UP　TIME（忘れかけている知識の復習の時間)』とした。ただし，６月と11月は「朝の読書」の時間とし，教材の使用はしていない。

教材は，１年生は義務教育段階での学習内容を中心としたもので，「基本用語の習得に資する漢字の指導」「筋道の通った文書を書くための基礎的な知識の習得と基本練習」「正しく筆記用具を持ち，字形を整えて書く練習」を行うものとした。２年生は，１年生の内容の継続と進路実現に向けた一般常識の基本問題，３年生では，進路実現に向けた問題演習を主な内容とした。

教材作成に際して，「基本用語の習得に資する漢字の指導」のページは，中学校の学習指導要領と教科書を各教科に配布し，基本用語を50～100語程度選び出してもらい，それを基に作成した。

実施に際しては，各クラスの担任・副担任で指導を行うため事前に教材を使用しての研修会を実施し，共通理解を図った。生徒に対しては，教材の表紙裏に使用方法と目的や意義を書き，事前にＬＨＲでの指導を行ってから実施した。

教材の表紙裏の内容

ブラッシュ　アップ　タイムとは，「忘れかけている知識を復習する時間」という意味を持っています。皆さんが中学校において学習してきた内容をもう一度思い出してもらい，高校3年間の学習をスムーズに進めていくための基礎となる力をつける時間です。内容は，

１，高校でのそれぞれの教科を学習するための基本用語の修得
２，作文（小論文）を書くための基礎知識の修得と基本練習
３，社会で通用する美しい字を書くための基本練習

を中心として１回10分間で行います。各回は100点満点で点数がつけられるようになっていますので，毎回100点を目指して頑張ってください。これらを毎日学習していくことによって，学力の基礎ができたならば，高校での各教科の学習は，かなりスムーズにできるようになります。集中して取り組んでください。

教材については毎週末の提出を義務付け，２，３年生では担任と副担任で点検し，ABC段階評価

を行い学期末に生徒に示した。１年生では，国語科の担当者に渡し，「国語総合」の評価に組み入れた。全学年とも，不十分な生徒に対しては，補充講座を行った。

②　平成22年度，ＳＨＲの有効活用と言語活動の充実のため，朝のＳＨＲにおいて全校で『まがたまノート（勾玉は本校の校章)』と名付けた連絡ノートを用い，連絡事項の聴写をさせた。また当該ノートには「私の目標」のコーナーを設け，聞く力・書く力を育成するとともに，目標をもった生活を送れるように指導した。表紙裏には使用方法と目的や意義を書き，人の話を聞くこととメモすることの訓練であることを強調した。

教材の表紙裏の内容

このノートは，朝のＳＨＲ時に使用します。実社会においても，メモをとり，計画的に一日を送ることは非常に重要な能力の一つです。きちんとメモをとる能力を養うことに，この「まがたまノート」が役立つことを願っています。「連絡事項」の欄は，先生やクラスの係からの連絡事項をよく聞いて，箇条書きでメモするようにしましょう。

【注意事項】①丁寧な字で，書くこと。　②なるべく漢字を使って書くこと。　③話をよく聞いてメモすること。　④話の内容をまとめて簡潔に書くこと。

「私の目標」の欄は，自分ができることを書きましょう。毎日同じでもかまいませんから，必ず書き入れて目標のある毎日を送ってください。【例】・あいさつをする　・しっかり授業を受ける。　・掃除を一生懸命する。　・クラブで～に取り組む。

実施に際しては，事前の研修会を行い，指導者がステップを設けて指導を行うことと定期的な点検の実施の必要性を訴えた。毎週末の提出を義務付け，誤字の点検訂正を行った。また取組状況のABC段階評価を行い，学期末に生徒に示した。

(3) 考察及び成果と課題

平成22年11月に行ったアンケートの結果をここに示し，考察を行いたい。

図１は，全教員へのアンケート結果であるが，『BRUSH　UP　TIME』『まがたまノート』とも生徒の取組は８割以上の教員が良かったとしている。問題の内容と問題の量も問題がないとしているが，一年間の取組の結果からは，まだ各教科の学習において顕著な効果があったとは言い切れず，今後高校の学習とどのように連携させていくかに課題が見られる。ただし，ほぼ全員から平成23年度以降も継続していくべきだとの回答があり，本校の取組として定着させていきたい。

図１

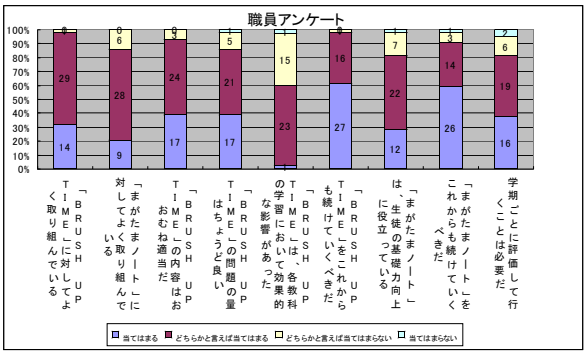
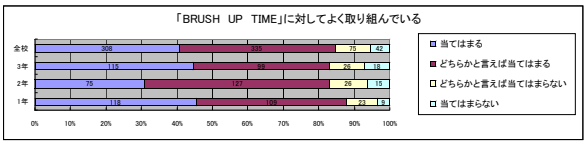
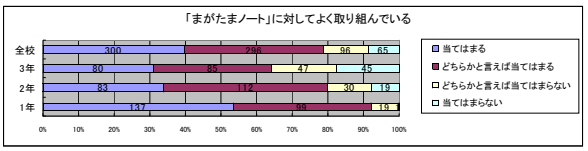
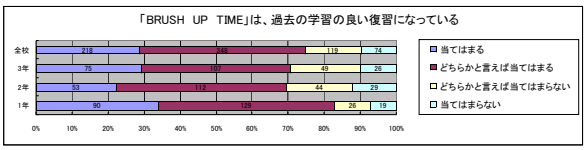


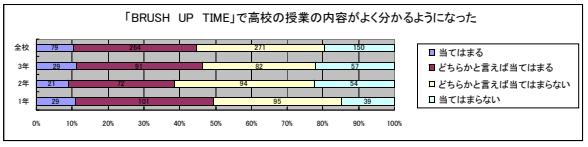
図２は生徒へのアンケート結果である。『BRUSH UP　TIME』『まがたまノート』ともほぼ８割の生徒が前向きに取り組んでいる。また約７割の生徒が過去の学習の良い復習になっていると考えているが，高校の授業には生かされていないと半数以上の生徒が感じているのは，教員へのアンケート結果と同じである。

図２









次に，教員の代表的な意見を列挙していきたい。

『BRUSH　UP　TIME』の効果については，「静かに学習に取り組もうという習慣付けになっている

と思う」「学習基本用語や計算についての授業以外の説明を行わずに済むようになった」「特定の教科というわけではないが，学ぶ習慣，知る習慣が付く機会になっている」「国語の漢字やことわざに興味を持つようになっている」などの意見があり，学習習慣の確立や基礎学力向上等の点で効果があると考えられている。

『まがたまノート』については，「指示を聞き取る注意力が高まった」「必要な情報をメモできるようになった」「漢字の使用に関しての意識が高まった」「落ち着いて授業に取り組もうとするクラスの雰囲気」「予定を考えて行動できるようになった」などの意見があり，落ち着いた学校生活や学習に取り組む基本的な態度の育成に寄与する部分が大きいと見られているようである。

３　研究の成果と課題

平成21年度に放課後10分間の学習を１年生において行い，平成22年度には始業時間を10分早め，８：35から全校で『BRUSH　UP　TIME』として実施した。更にSHRでは『まがたまノート』を使用し，基礎学力向上と言語活動の充実を図る取組を行ってきた。心配された遅刻数の増加もなく，学校生活のスタートが落ち着くことにより１時間目からの授業においても良い影響が見られ，主体的に学習活動に取り組む姿勢が見られるようになるなどの成果があった。『まがたまノート』も，聞く力・書く力の育成や漢字についての知識の拡充などの成果が見られた。また教員の側でも，教材作成の過程において，中学校の指導要領や教科書を見直すことで高校の授業との関連性を再確認することができた。

課題としては，まず，国語科としての取組の限界ということである。平成21年度当初は，言語活動の充実を軸として義務教育段階での学習内容の確実な定着を図る指導方法を模索してきたが，生徒の学習意欲を更に高めていくという意味では，数学や英語などの幅広い指導が必要であることが明確となってきた。このことを踏まえて，平成22年度は，１年生において「国語総合」の増加単位としたが，平成23年度は全学年課外学習として継続する予定である。ただし将来的に，学校設定科目として設定するための研究を継続していきたい。

次に，各教科・科目の学習へのフィードバックについてである。平成22年度より全学年での取組となったことで，３年間の指導計画や方針を策定することができるようになった。それをすべての教員に提示し共通理解を図ることにより，各教科との効果的な連携を含めたよりスムーズな運用が可能となり，一層の成果が期待できると考えている。３年間でどのような生徒を育て，社会へと送り出すかというビジョンを共有することが，３年後のたくましい生徒の姿につながるものと考えている。

生徒が意欲的に取り組み続けられるよう，教材を常に改良していくことも忘れてはならない。取組の結果に差が生まれてきたこと，また，進路を視野に入れた生徒個々の専門性や興味・関心の違い，問題の量や質，解答の示し方など，様々な反省点を踏まえて，平成23年度に向けて，更に改良した教材を作成していく予定である。

また，研究成果については，各種研修等で県内外において普及を図り，一定の反響を得てきたが，各校における生徒の現状や課題に差があることから，共同の研究や教材開発につなげていくことは，まだできていない。より普遍的な指導の体制や教材づくりに向けて，更に研究を進めたい。

最後に，平成23年度以降もこの取組は「BRUSH　UP　TIME推進委員会」が中心となって推進していくが，その中でも，国語科が担う役割は大きいと考えている。日々の授業や進路選択，進路実現のための基本となる言語力を育て，高校卒業後には実生活の中で生きてはたらく国語の能力の育成を図るためにも，この『BRUSH　UP　TIME』と『まがたまノート』を軸として，今後も主体的に学習に取り組む態度の養成を図り，基礎学力の向上や言語活動の充実に一層取り組んでいきたい。

平成２２年度研究成果報告書≪教育課程≫

ふりがな	しりつめいしょうがくえんじゅとくこうとうがっこう
学校名	私立明照学園樹徳高等学校

校 長 名：星野　幸一
所 在 地：群馬県桐生市錦町１－１－２０
電話番号：0277-45-2258

新学習指導要領の趣旨を具体化するための指導方法等の工夫改善に関する研究	
研究対象教科等	国語（古典）

≪研究主題≫

生徒が古典に親しみをもち，関心・意欲を高められる指導方法の工夫・改善

【研究の要点】

本校は進学を希望する生徒が8割を超えている。進学を目指すための授業に取り組む中で，古典の授業が進学対策に偏る傾向があり，どうしても機械的暗記作業が優先されがちである。そのために，古典が嫌いだと答える生徒も少なくない。

そこで，暗記に偏りがちな古典の授業の在り方を見直し，関心・意欲をもって学習に取り組める授業を展開していきたい。そこで，言語活動や，作品世界を有機的に関連付けるような単元づくりなどを授業に取り入れることで，古典作品を息の通ったものとして感じられるようにしたいと考えた。

そこで，まずは生徒の意識調査を通して古典の学習に対するイメージを知ることから始めた。そして，「読み比べる」実践を中心に据え，具体的に以下の実践を行ってきた。

(1)　伊勢物語「筒井筒」と大和物語「沖つ白波」とを読み比べる

同一の題材を扱った2つの作品を読み比べ，表現の特徴や作者の意図を探った。

(2)　平家物語「木曾の最期」を多角的に読む

朗読をどう工夫するかを自分なりに考え，班ごとに発表し合った。また，能「巴」と読み比べ，巴御前の描かれ方を比較した。

(3)　伊勢物語のうち，在原業平と二条の后が登場する章段を読み比べる

教科書に取り上げられている作品を含めて両者の登場する章段を読み，描かれ方を考え，当時の読者にとってどのような印象を与える章段であったかを考えた。

(4)　源氏物語の現代語訳作品を読み比べ，作品を読み味わう

多数存在する現代語訳作品を同一場面を取り上げて読み比べ，それぞれの特徴を探っていき，原文の魅力に迫った。

これらの実践を通して，古文の逐語訳的な読みの授業ではなく，作品世界をより深めていくための読みを目指すことによって，生徒も作品に対する印象が深くなり，様々に思考を深めていくことができた。

実践では複数の文章を活用して読み深めることを中心にした。生徒は，複数の文章を読み比べることで表現の特徴や執筆意図の違いなどに気付き，作品により興味を抱くことができていた。教師も文法的な解説に偏りすぎることのない授業を意識できた。

さらに，読み取った内容をもとにした話合い活動を通し，互いの意見の相違点を知ることにもつながった。

一方で，意識調査や聞き取り調査からは生徒の「古典に対する苦手意識」「言語活動への抵抗感」が明らかになった。この意識は2年間の研究のまとめとして行った意識調査でもはっきりと示され，むしろ「古典嫌い」が増える結果となってしまっていた。実践をただ行うだけでは効果が薄いことが明確になり，「古典」という科目の捉え方から考え直していく必要があることが分かった。

同時に，「読む」ことへの抵抗感が薄れてきていることも分かった。これは実践を通して生徒たちが読む活動の楽しさを感じてくれた結果であるとも言える。

今後は，「古典」という科目の捉え直しから始め，各単元におけるベストな授業形態の研究，興味・関心を高めることと受験学力を育成することの両立，言語活動することのみが目的となってしまわないこと（言語活動をどう活用していくか）の教師・生徒双方の意識化といったことが大きな課題である。

Ⅰ　研究指定校の概要

１　学校・地域の特色及び実態

本校は群馬県東部に位置する私立高校であり，群馬県中部や東部，栃木県西部から通学する生徒が多い。また，普通科のみの設置で，進学を希望する生徒が８割を超える。

進学を目指すための授業に取り組む中で，古典の授業が進学対策に偏る傾向があり，どうしても機械的暗記作業が優先されがちである。そのために，古典が嫌いだと答える生徒も少なくない。

２　学校の概要（平成22年4月5日現在）

課程	学科	１年		２年		３年		計	
		学級数	生徒数	学級数	生徒数	学級数	生徒数	学級数	生徒数
全日制	普通科	12	419	11	377	10	321	33	1117
	中高一貫校	2	54	2	53	2	42	6	149
	計	14	473	12	430	12	363	38	1266
計		14	473	12	430	12	363	38	1266

教員数　９８名（１７名）

本研究は普通科進学コースを対象としている。１年次に国語総合５単位，２年次に現代文２単位，古文２単位を実施している。

Ⅱ　研究の内容及び成果等

１　研究主題等

(1) 研究主題

生徒が古典に親しみをもち，関心・意欲を高められる指導方法の工夫・改善

(2) 研究主題設定の理由

暗記に偏りがちな古典の授業の在り方を見直し，関心・意欲をもって学習に取り組める授業を展開していきたい。そこで，言語活動や，作品世界を有機的に関連付けるような単元づくりなどを授業に取り入れることで，古典作品を息の通ったものとして感じられるようにしたいと考えた。

(3) 取組体制

本校国語科のうち，同一学年で進学コースを担当する３名の教員が取り組んだ。また，適宜他の国語科教員の協力を仰いだ。

研究発表会では群馬大学教育学部藤本宗利教授に指導・助言をいただいた。

(4) ２年間の主な取組

平成21年度	６月	古文の学習」に対する意識調査
	10月	「筒井筒（伊勢物語）」と「沖つ白波（大和物語）」とを読み比べる
	11月	「木曾の最期（平家物語）」を多角的に読む
	12月	先進校視察（横浜国立大学教育人間科学部附属横浜中学校）
	12月	「学習形態」に関する聞き取り調査
平成22年度	６月	『在原業平と二条の后』を読み比べる（伊勢物語）」
	11月	「現代語訳を読み比べ，読み味わおう（源氏物語）」
	12月	研究発表会

２　研究内容及び具体的な研究活動

(1) 研究の重点

「古文の学習」及び「言語活動」に対する生徒の意識を知る

(2) 具体的な取組

①　「古文の学習」に対する意識調査

古文の学習に対して抱いている意識をアンケート形式で調査した。その結果，古文は好きである一方で不得意であるとも感じていた（図１，２）。また，受験に対する学力を求める一方で，興味深いエピソードや様々なジャンルの話にも触れたいと答えていた（図３）。

また，学習形態に関しては，教師が板書で

教えていくといういわゆる一斉授業形式を好んでおり，逆にグループ活動や調査活動など自主的に取り組む形態については好まないという結果であった（図４，次ページに掲載）。

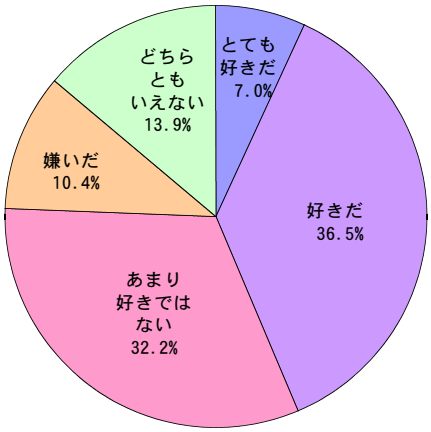


図１　古典の授業が好きですか

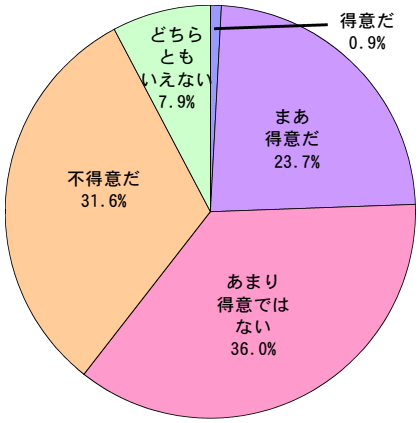


図２　古典の授業が得意ですか

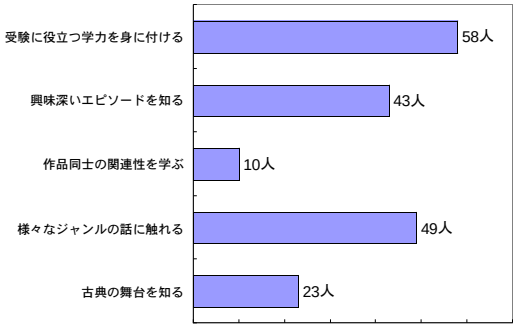


図３　高校での古典の授業に何を期待していますか

②　「学習形態」に関する聞き取り調査

意識調査の結果を受け，生徒が学習形態に関して抱いている意識について聞き取り調査を実施した。

調査学習や話合い活動を好まない理由を聞き取った結果，以下の点が明らかになった。

・　活動そのものが目的となってしまい，活動から得られることが少ない
・　活動の手順やゴールが明確ではないために，活動に取り組みにくい

(3) 成果と課題

教師が黒板を使って教える，いわゆる一斉授業形式に生徒は慣れている。それが明らかになった。そしてそれは生徒だけではなく教師も当たり前のように行っている。

もちろん，一斉授業という形態にも意義がある。しかしそれはあくまでも一つの形態であり，教師はその固定観念から離れ，言語活動を中心に据えた授業を展開していかなくてはならない。

生徒が古典嫌いになる原因の一つに，訓詁注釈的な授業がある。教師からすれば「教えている」感の強い，満足感のある授業になるかもしれない。しかし，それだけで授業が構成されてしまえば，生徒は古典をつまらないものとして認識してしまう。

生徒の古典嫌いを少しでも減らしていくためには，言語活動を手段として活用した授業を展開していくことが必要である。ここで注意すべき事は，言語活動を「ためにする」ものにしないことであろう。目的と手段の意識を明確にもち，言語活動を通して生徒に何を身に付けさせたいかを意識したい。

そのために，今後は以下の点に留意したい。

・　年間指導計画に沿った，意義のある言語活動の設定
・　生徒に目的意識をもたせた授業の展開

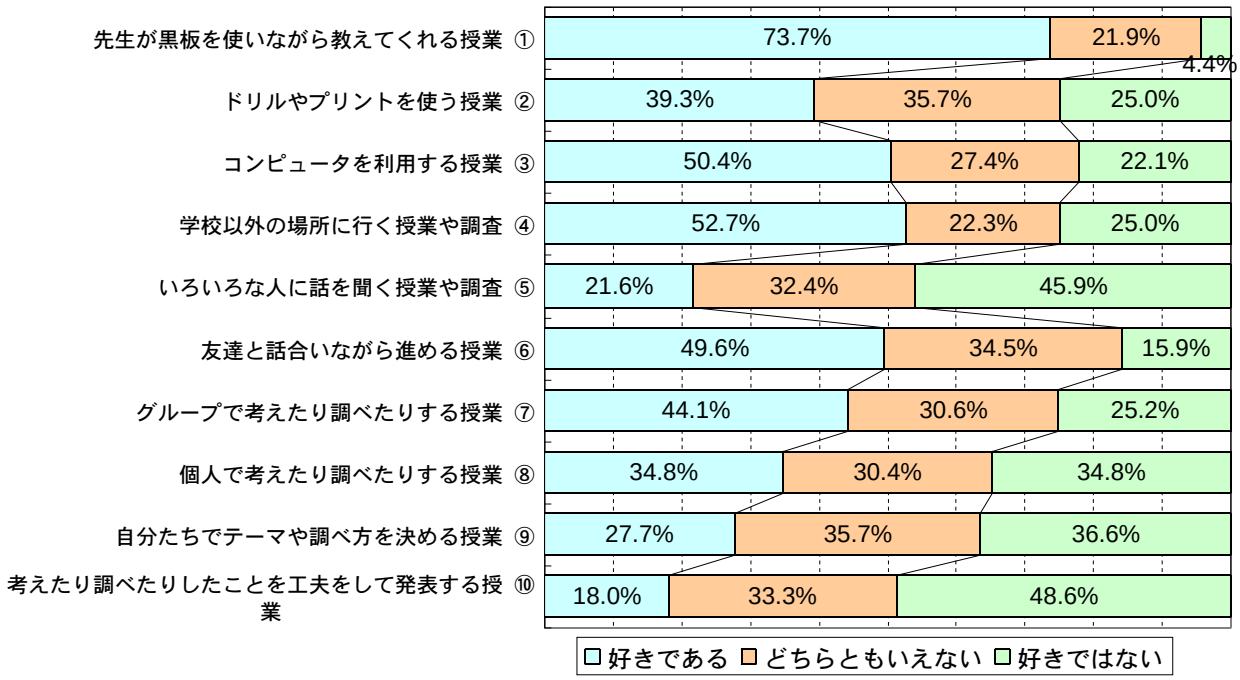


図４　次にあげる学習形態は好きですか

(1) 研究の重点

作品を鑑賞する授業の工夫（１年次）

(2) 具体的な取組

①　伊勢物語「筒井筒」と大和物語「沖つ白波」とを読み比べる

上記両作品は同一の題材を用いているが，題材のどこに着目するかなどが異なるため，両作品の雰囲気や味わいに違いがある。そこで，「筒井筒」を読んだ後に「沖つ白波」を読み，その違いについて生徒に考えさせた。

単元開始時に「『筒井筒』と同じ題材を用いた別の話がある」ことを予告し，読み終えた後に「沖つ白波」を紹介した。「沖つ白波」は教師が音読し，それを聞きながら「筒井筒」と異なる点についてメモをしていった。「沖つ白波」はあらかじめ現代語訳のプリントを配布し，訳すことに負担がかからないよう留意した。

２クラスで同じ授業を展開したが，展開の流れは以下のように変えて試した。

・　「描写の違い」をまとめた上で「執筆意図の違い」を考えさせ，最後にどちらのエピソードを自分は魅力に感じるか，を考えさせる

・　先に自分の魅力に感じるエピソードを決め，その上で「描写の違い」「執筆の意図」などからその理由をまとめさせる

生徒からは，大和物語は「心理描写が詳しい」「なぜそうなったか，理由が書かれている」などの意見が出る一方，伊勢物語は「余計な説明がなくシンプル」「想像力を働かせやすい」などの意見が出た。また，どちらの作品を選びたいか，という問いに対しては大和物語を選ぶ生徒が全体的に多かった。

②　平家物語「木曾の最期」を多角的に読む

平家物語「木曾の最期」前半部分を内容で場面分けしてその中から朗読したい部分を選ばせた。その部分の特徴を考えた上で，その特徴をどう表現するかをワークシートにまとめさせ，朗読した。生徒は，義仲の名乗りや戦の場面などそれぞれの特徴を踏まえて朗読

に取り組んでいた。

また，この場面でのみ登場する巴御前の心情に着目した。まず，義仲が「去れ」と言ったときの心情や巴の最後の戦いにおける心情を考えさせた。最後まで生死を共にしてきた二人の言動に隠された心情を話し合い，特に敵の首をねじ切る巴の気持ちについて考えを交わした。

また，能「巴」を読み，ここで示されている巴御前の心情について話し合った。生徒からは，「平家物語では語られない巴の女性らしい心情が描かれている」「勇猛さも伝わってくる」という意見が出た。

(3) 成果と課題

① 「描写の特徴」は，同じエピソードを利用した作品同士で比較することでその特徴を際立たせることができた。更には，そこから作品そのものの性格の違いにまで意見を出し合うことができた。

生徒は実態調査の結果「複数の作品同士を比較する」ことの楽しさを知らない様子が伺えた。この実践によって楽しさを知ることで，今後の学習においても作品同士を有機的に関連付けて考える意欲をもてると考える。

一方，今後の実践においても同様の「比較」「読み比べ」の題材を提供しなければ一過性の実践で終わってしまうため，第２学年以降の「古典」でも教材として準備していく必要がある。

「意見→理由」と「理由→意見」の二つの流れで実践してみたが，どちらがよいか，ということについてはまだ結論が得られない。分析的に考えた上で結論を出させる方法と，まず印象を問うてからその理由を考えさせる方法とについて，どのような題材に合うかを検証していきたい。

② 朗読については，和漢混交体の力強さを実際に感じるよい機会になった。今後は，群読を取り入れてもよいかと思う。

また，能についてはできれば映像で見せたかったが，入手できなかったため文章で台詞を読んだ。ただ，生徒は意味を考えながら読むことができたため，その点で意味があったと考える。

生徒も，ただ字面を追いかけるだけではなく，どのような心情からこういった表現になっているのかを考えるよい機会となった。

(1) 研究の重点

作品を鑑賞する授業の工夫（２年次）

(2) 具体的な取組

① 「許されざる恋　～『在原業平と二条の后』を読み比べる～（伊勢物語）」

教科書には，在原業平と二条の后との関係を描いたとされる「通ひ路の関守」「芥川」などが採録されている。ここで，両者の関係について描いた章段を更に取り上げ（第２～６段），それぞれを訳しながら両者の関係について話し合った。全てを現代語訳するには時間がかかるため，生徒ごとに章段を分担し，それぞれが現代語訳を作った後，それを互いに回覧して読み合うこととした。

生徒は一年時に「芥川」を既に読んでおり，そこに至るまでの話の流れを興味をもって読

んでいた。また，実際の人物関係や当時の政治状況などとあわせて考えることで，悲恋に終わらざるを得ない二人の関係についてより強く感じることができていた。

（生徒の感想から抜粋）

・　現代でいうところの恋愛小説を読む感覚だったと思う
・　うらやましいって感じた。当時の女性は二条の后になりたいって思ったと思う

② 現代語訳を読み比べ，読み味わおう（源氏物語）

源氏物語は人間関係の複雑さと，そこから生じる敬語の難解さが，学習者から敬遠される要因ともなり，ともすれば訓詁注釈的な授業にもなってしまう。そこで，様々な作家が著した「現代語訳」を読み比べ，それぞれの作家の視点の違いを比較し合うこととした。また，そこから原文に立ち戻ることで新たな魅力を発見することを目的とした。

原文と標準的な訳を用意し，それに７種類の現代語訳・翻案作品を用意した。生徒は作品を読み比べ，比較の視点を自ら設定する。その視点を生かした読み取りの結果を話し合い，現代語訳のもつ魅力や，そこから原文に立ち戻ることの意義について考えた。

原文に立ち戻ることの意義については，生徒から次のような意見が出された。

・　情景や景色が鮮やかに見えてくる
・　現代語訳と同じだけの視点を得られる
・　一つ一つの単語の意味も深く分かる

(3) 成果と課題

① 第二段から順に第六段まで読み進めていくと，業平が求婚し続けていく様子が分かってくる。「ひじき藻」が第三段に唐突に登場することに生徒が興味を示したり，相手の女性が第五段（通ひ路の関守）で明らかになるなど，物語の流れを感じることができた。

教科書に掲載されている文章だけでは，生徒はその前後のつながりを意識することができず，そこから興味を広げることが難しい。他作品と比較しながら読むことはあったとしても（上記教材），それが全ての単元に用意されているわけではない。その点で，本実践の読みは生徒の興味を引き出せるものと考える。更には，在原業平が登場する他の作品（今昔物語集など）を題材にして読み深めていくのも面白さがあると考える。

② 現代語訳の比較から様々なことが見えてきた。一つの単語がどのように訳されているかを複数の作品で比較した結果，改めて単語の意味に気付くことができたり，計量国語学的なアプローチを取った生徒の活動からは，作家の性別や時代によって現代語訳の特徴が見えてくることも分かった。

一方で，現代語訳の読み比べはともすると原文を置き去りにしてしまう可能性があることも分かった。現代語訳を比較してその魅力を語って終わりにするのでは，古典を学ぶとは言えない。そこから原文を読むことにどうつなげるか，それを考える必要がある。

(1) 研究の重点

２年間の古典の学習を踏まえて生徒の意識の変化を調査する

(2) 具体的な取組

研究対象としたクラスの生徒に意識調査を実施し，１年次の意識調査の結果と比較した。

古典が理解できているかどうかを，高等学校入学後と現在とで比較したところ，１年次では「ほぼ理解できた」が23.9%であったのに対し，２年次では6.5%と激減している。その分，「理解できなかった」と答えた生徒が2

3.9%から41.3%へと増加した。（図５）

前回調査では，中学時点よりも高校入学後の方で「ほぼ理解できた」と答えた生徒が減っていたが，それが更に進んだ結果となった。授業実践で理解のための工夫を凝らしてきたつもりではあったが，生徒が「理解できた」と実感できるまでには至らなかったことが分かった。

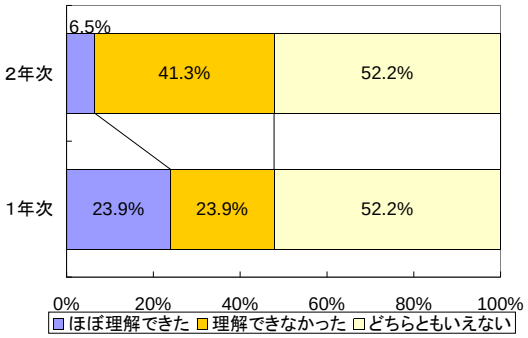


図５　古典の授業が理解できましたか

また，古典が好きかどうかを聞いた（図６）。

図６を見ると，「とても好きだ」「好きだ」があわせて30.5%で，１年次の47.9%に比べて10%以上減少している。一方で「あまり好きではない」「嫌いだ」があわせて60.8%と，１年次の43.7%から大幅に増加している。

文法や単語といった暗記事項の増加，模擬試験などで思うように文章が読めず問題が解けないことへの不安・不満など，苦手意識を大きくさせる要素ももちろんあろう。しかし，これまでの実践が生徒の関心・意欲を高めるだけの力がなかったことも事実である。

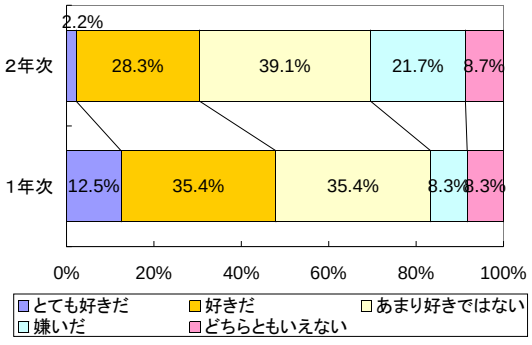


図６　古典の授業が好きですか

一方，図７を見ると，古典の作品を読むことに対してそこまで興味を失っていないことが分かる。

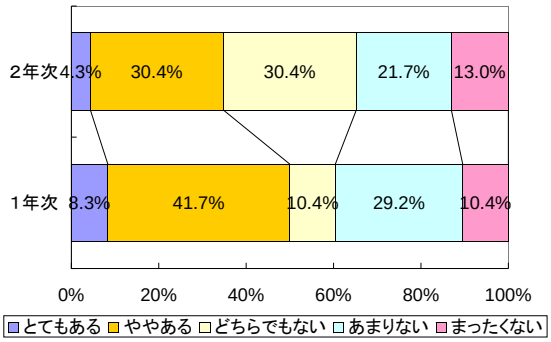


図７　古典作品を「読む」ことに興味がありますか。

結果を見ると，「とてもある」「ややある」の合計は１年次の50.0%から２年次の34.7%へと減少しているが，「あまりない」「まったくない」の合計は１年次の39.6%から34.7%へとこちらも減少している。「どちらでもない」が増えていることから，両者の減少分が中央に集まったと言えるが，嫌いになった生徒が増えたのではないという点は，読むことへの抵抗感の減少を読み取ることができる。

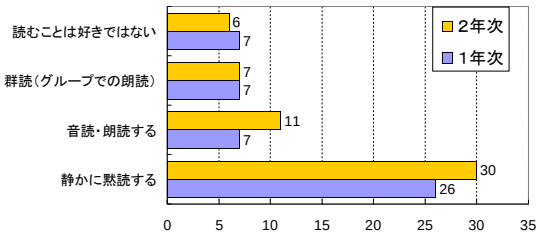


図８　古典作品のどんな「読み方」が好きですか

図８は，「古典作品のどんな『読み方』が好きですか」という質問に対する答えである。ここで，「静かに黙読する」「音読・朗読する」の２つにおいて「好き」と答えた生徒が増加している。数としては多いわけではないが，読むことへの抵抗感が薄れていることを読み取ることができる。

(3) 成果と課題

本調査からは，古典の授業実践そのもので

はなく，「古典」という科目の捉え方から再考することの必要性が分かった。

ただ，「読む」ことに対する意識は良い方向へと変化していることも分かる。本研究そのものが生徒の意識を変化させているとも言えよう。今後は，古典という科目全体を見据え，どのように単元を設定し授業を構築していくかを考えていきたい。そうすることで，生徒の古典に対する意識も徐々に変化していくだろう。

3　研究の成果と課題

(1) 研究の成果

２年間の研究を通し，逐語訳だけに陥らない古典の授業を構築することができた。生徒は教科書にある文章を読み，文法を学び，単語を覚えることだけを古典と感じがちだが，それでは「教材を学ぶ」だけの授業になってしまう。文章を読むとは，単に意味を取るだけの行為ではない。文章を読み，そこに描かれた世界を楽しみ，更に自らの想像を膨らませていくところに魅力があるはずである。生徒たちも，「教材を学ぶ」を越えて「教材で学ぶ」世界に触れることができ，古典に対する興味を更に深めることができたと考える。

また，今回は「複数の文章を読み比べる」ことを中心に据えた。さらに，読み比べの結果を話し合うという言語活動も取り入れた。文章はそれぞれが独立して存在するのではなく，互いに関連し合い，それが古典の世界に深みを与えている。教科書に掲載されている教材はあくまでも入り口であり，そこから発展させていくことで，生徒たちの興味・関心へとつなげていくことができると分かった。

(2) 今後の課題

研究当初からの課題として，「興味・関心の深化」と「学力向上」との両立があった。楽しんで学ぶのも重要だが，活動を楽しむだけで終わるのでは意味がない。はいまわるだけの活動になってしまうし，なにより，「受験学力の育成」という，生徒が国語の授業に求めている重要な要素を欠くことになってしまう。

これまでの実践を振り返ると，文法事項を集中的に覚える期間や，課外授業を利用した問題演習も同時並行的に実施してきた。しかし，それぞれがどこまで有機的に関連しあっていたか言えば，疑問が残る。それぞれが独立して行われているだけであり，身に付けた能力を生かして楽しむところまでは意識できなかった。実際，生徒の古典嫌いも進んでしまっており，生徒の古典嫌いを減らしたいという当初の目的を達成できてはいない。

今後は，これまでに育成してきた学力が各単元にどのように関連するのかを考え，年間授業計画を立て，個々の単元での具体的な活動に落とし込んでいきたい。それが今後の自らの課題であると考える。先行研究などを見ても，三年間の流れや他教科との連携など，実践を単発で終わらせないための取組が多く見られる。本研究で実践した「読み比べ」を，古典の授業全てで行うことは不可能である。当然のことながら，適切な場面で用いていくことになるだろう。その「適切な場面」を考えるには，やはり見通しが重要になってくる。今後，読み比べ以外の言語活動も積極的に取り入れていきたい。そのための計画づくりに注力していきたい。